

## 授業の「荒れ」にどう対処するか

豊橋工業高校教諭 三浦 孝

生徒が授業を聞かない、指示に従わない、注意すれば暴言を吐く、授業が私語にかき消される—こういう「荒れ」に直面した時のショックは、教師ならおわかりであろう。それはまさに驚愕するほどの恐ろしい体験である。なぜなら、自分が教師として機能していないことを、事実としてはっきりと見せつけられるからである。

筆者もこうした経験をしてきたし、今後いつまた経験するかもしれない。そんな自覚を持ちつつ、今授業の荒れに苦しんでおられる先生へのアドバイスを書こうとしている。

ここでは「荒れた授業」への治療法を、緊急性の高い順に3段階に分けて論じてみたい。その3段階とは①教師の危機救済、②授業の秩序立て、③意味ある授業づくり、の3つである。

### 1. 教師の危機救済

授業の荒れのために教師が自信喪失に陥っている場合には、何よりもまず教師に relief を与える必要がある。教師がパニック状態にあったのでは、授業の荒れに効果的に対処することは望めないのである。筆者は自分自身に次のような relief を用いている。

(1) 授業がうまくいっている振りをしない。「こまった、もうだめだ!」と公言する。(うまくいっている振りをしていると、誰も心配してくれない。いざという時に相談できない)

(2) 「私の授業が荒れていたって、それで世界が滅びるわけじやあるまいし」とたかをくくってみる(自分を責めて事をすごす小心さは美德でもなんでもないのだから)

(3) 「春になったら先生を辞めよう」と自分に言い聞かせる。辞めて、好きな英語で身を立ててゆけるように、がむしやりに英語力を高める。(筆者もこの方法で英接1級、通訳検定2級とガイド試験に挑戦した。大学時代の友人は本当に教師を辞めて大学院に入り、今では助教授になっている)

(4) 生徒を研究対象とし、「授業の荒れ」や「学力不振」に関する研究に着手する。そのために、観察対象として生徒を見る。(どんな問題行動も、研究対象として向き合うと毒気を失ってしまう)

このような助言を、ふざけていると受け取るむきもあるかもしれない。しかし、教師自身にこれくらいの心の余裕がなければ「荒れる教室」で教え続けることはできないと思う。困った時ほど、学校を相対化して見る必要がある。

### 2. 授業の秩序立て

「授業の中身さえ良ければ、生徒は自然に授業を静粛に受けるようになる」というほどの自信は筆者にはない。私語のために教師の声が届かない場合、どうやって生徒に授業の中身が理解できよう。ある程度の秩序を生徒に要求することは、意味ある授業作りと並んで「荒れ」治療の両輪だと思う。筆者は、次のようなありきたりのことを生徒に要求している。

(ア) 教科書とノート必携、(イ) 黒板は、始業前に消す、(ウ) 定められた座席に着席、(エ) ひそひそ話以外の私語は禁止、ただし発言を奨励、(オ) 他の生徒の発言を妨害するな、(カ) 教師に対する無礼な口のきき方には、その場で教師自ら抗議する。

意外なことに、教師はこういう要求を生徒に向かって表明するのが下手である。またあきらめるのがとても早い。教師は言ったつもりでも、生徒には伝わっていないことがよくある。要求は「生徒に何をしてほしいのか」をはっきり言うことが必要だ。たとえ最初は生徒が全く耳を貸さなくても、同じ注意を3ヵ月続行すれば生徒も聞くようになる(だがたいていは3ヵ月経つ前に教師の方があきらめてしまっている)。

もちろん教師も自己を律する必要がある。採点間違いが多い、テストの問題が予告した範囲と違う、生徒の名前を覚えていない、前回の授業でどこまで進んだかを覚えていない、などといった教師は、特に底辺校では生徒に信用されにくい。

### 3. 意味ある授業づくり

上記のような秩序立てによって、授業態度はある程度改善できよう。しかし、学習内容が生徒にとって意味(価値)を持たないかぎりには、どんなに静粛に見えても授業はしょせん奴隷的苦役にすぎなからう。

高校を卒業したら就職し、「不定詞」にも「仮定法」にも「関係代名詞」にも関係ない人生をおくろうとしている生徒達にとって、英語授業はいったいどんな意味(価値)を持ちうるのだろうか。この問に対しては、参考になる優れた実践が幾つか既に報告されているが、ここでは筆者自身の転機となった出来事について書いておきたい。

1981年当時、筆者の勤務する高校では生徒の「荒れ」が頂点に達していた。つっぱり生徒が集団化して学校をのし歩き、暴力、いじめ、反抗が多発していた。授業では教科書も持たず、勝手に席を離れて大声で私語を交わす者が現われ、注意すればいちいちくっつかかり、授業をはじめられない。私語はもはや生徒全体に拡がり、英文読みのリピート練習に返ってくる声は皆無であった。

筆者はこの騒乱に、徹底的な締め付けで対処し

た。要するに授業の進度を早め、定期考査の問題を難しくして、落第を脅しに用いた。こうして最悪の3年生を卒業させた後、振り返ってみればあまりに空しかった。難解な文法事項や夥しい単語を、消化できないと知りつつ押し付けたにすぎなかった。不快感に歪んだ生徒の顔、授業を重ねるたびに離れていった生徒と自分。同級生同士が罵倒しあい、いじめ、憎み合う「荒れ」の中で、この英語授業は彼らに何の救いもうるおいも与えはしなかった。

言語は人と人とを結ぶものはずである。それが逆に人と人との間を絶ち切るとしたら、いったい何のための言語教育なのだろう。その時の教材にも、筆者という教師にも、文法訳読という指導法にも、現実の人と人とを結ぶ力は無かったのだ。

「本当に語りあうために英語を使おう。自分が今一番訴えたいことを、生徒に英語で話し、生徒はどう思っているのかを英語で聞こう」そう決心した。そう決心してしまえば、語りたいことは山ほどある。さっそく「いじめ」「電車内暴力」「恋愛」「良い職業とは」「良い学校とは」をテーマとした事例を英文で書き、それに生徒の意見表明用の選択肢を付けて教材とした。例えば「いじめ」のテーマでは次のような事例で出発した。

●3.1 事例の提示

I. STORY

Several years ago in Tokyo, a ten-year-old boy dived from the top of a tall building and killed himself. His name was Fumito. In his room he had left a letter to his father.

*All my classmates bully me. I can't bear it any more. They neglect me when I speak to them. They say I have a bad smell. They call me "the god of death." They laugh at my face and body. They tear my clothes. They break my pencils. They hide my textbooks. They beat me for fun. They hate me. They want me to die.*

*How can I escape from the bullying? No one helps me. Death is the only way. Good bye, Father. Please forgive me. Fumito*

3.2 comprehension

次に comprehension 問題を置いて、事例の大意をつかませた。

II. COMPREHENSION: Complete these sentences.

1. What was the name of the boy?  
---His name was ( ).
2. Is he alive or dead now?  
---He is (alive, dead) now.
3. Why is he dead?  
---Because he (was killed, killed himself).
4. What does "bullying" mean in Japanese?  
---It means "( )."
5. Why did he kill himself?  
---Because he was (bullied, loved) by his classmates.
6. What was his nickname?  
---It was ( ).
7. Who tore his clothes?  
---His ( ) did.
8. Who hid his textbooks?  
---His ( ) did.
9. Who beat him?  
---His ( ) did.
10. Why did they beat him?  
---Because it was (fun, right).
11. Who helped him?  
---( ) helped him.

III. DISCUSSION

次に、Fumito 少年の関係者の弁明を英語で載せ、それぞれの弁明に対する生徒の見解を問うた。

Interview: WHY DID YOU BULLY FUMITO?

Boy A: "Because everyone did."

Boy B: "We were only playing. I thought Fumito enjoyed it."

Boy C: "Because B told me to do that, I was afraid of B. As long as Fumito was bullied, I was safe."

Girl D: "I once tried to stop bullying. Then my classmates began to bully me. So I shut my mouth."

Girl E: "I didn't bully him. I just watched it. Fumito was always slow, dirty and clumsy. He was disliked by everyone."

Teacher: "It is very difficult to tell bullying from playing, I imagine Fumito took things too seriously."

実際に学校にはいじめが横行し、そのために休学者も出ていた。ひょっとしたらいじめの首謀者が私にくっついてかかってくるかもしれない。絶対に譲ることのできない信念を込めて、

"I must find out the fact about my son's death. It is the only kindness now I can do for him."

という少年の父の言葉を読み上げた。生徒はと見ると、私語は無く唇を固く結び、目が据わっていた。

"We were only playing. I thought Fumito enjoyed it."

という首謀者の弁明に対して生徒の見解を問うと、"acceptable" と答える者は皆無で、大多数が "unacceptable" に挙手した。さらに生徒達は B, C, E, teacher の答えをも unacceptable とし、Dのみを acceptable と表明した。筆者は司会者に留まって自分の意見は述べなかったが、生徒は自分の判断でいじめを裁いたのである。これが、「何のために英語を教えるのか」について自分なりの答を見出した日であった。

この方式の授業では、生徒からずいぶんいろいろなことを教わった。「恋愛」を話題にした授業では、片想いの相手に第一声をかける工夫を、「音楽」では生徒の好きな歌手や曲を、「幼年時代」では出生時の体重を、「夏休み」では自転車で1ヵ月かけて豊橋から九州へ旅行してきた生徒の体験を聞いた。1つのレッスンを経るたびに、生徒と私との距離が近付いていくのがわかった。

しかもこれらのことを教えてくれたのは、従来英語の得意な生徒ばかりではない。英語能力には関係なく、すべての生徒がそれぞれ他にはまねのできないユニークな内容をクラスに貢献することができた。linguistic ability という一元的価値に加えて、content というもう1つの価値を教室に加えることとなった。

実はこの授業によって一番救われたのは教師自身であった。それまでの授業ではどうしても生徒

と対話する関係が作れなかったが、ここでは対話を中心となった。そうして生徒と話していると、その年頃の生徒の持つやさしさやユーモアが伝わってきてハッとさせられた。私の中にあつた、できない生徒への反感や教えることへの虚無感は、こうして氷解していった。

それ以後は、「言語は人と人とを結ぶもの」という立場で、日本の高校で実施可能な教室内討論の指導法と教材作りを続けている。インプットを中学3年レベルに、アウトプットを中学1年2学期レベルに設定すれば、ほとんどの高等学校で英語による意見表明は可能である。これはおもしろくてやめられない。それもこれも、「荒れる」教室で思いがけずも宝の山を掘り当てたおかげかもしれない。

#### 参考文献

- (1) 土屋伊佐雄、1982、『明日の英語教育—Educational Approachの構想J、明治図書
  - (2) 太田佐知子、1988、「興味の持続を図ることで学力向上を目指す英語教育」、三省堂英語教育賞審査委員会(編)『これからの英語教育』、三省堂、pp.3~27
- 齋藤栄二、1990、『英語を好きにさせる授業』、大旅館書店  
寺島隆吉、1984、「定時制に歌声よおこれ」、小川芳男、若林後輪(編)『つまり生徒とともにJ、三省堂、pp.113~137

(愛知県立豊橋工業高校教諭)

現代英語教育 1991年10月号